

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 550

## どうしても避けて通ることのできない「暗い可能性」

文芸評論家の山城むつみが「アンドレア・イエーツ事件のこと」（『新潮』06・7）で、我々を立ち止まらせてしまう深刻な問題に暗い光を当てている。まずアメリカで起こったアンドレア・イエーツ事件について説明しておかなくてはならない。5年前、2001年6月20日にテキサス州ヒューストンで、《実の母親であるアンドレアが生後6ヶ月から7歳までの自分の子ども5人をバスhtubで溺死させた事件》が起こった。《当時、アメリカのマスコミで衆目的となった》が、母親が自分の子供を殺害するという同種の事件が日常的に多発している《日本ではあまり報道されなかった》。この事件の3ヶ月後に起こった9・11によって、アメリカでも《大方の関心は「テロ」に移った》。

事件についてはもう少し詳細に記されている。

《夫はNASAに勤務していた。その日も朝9時に家を出ている。夫の母親が子ども達の世話をしに来ることになっていたが、まだ到着していない。子どもたちはみな起きている。シリアルを朝食に食べている。アンドレアはバスhtubに水を張り始めた。

3歳のポール、2歳のリューク、5歳のジョン、6カ月のメアリー、7歳のノアの順にひとりひとり浴室に連れて来、バスhtub一杯に張られた水の中に、彼らの頭を、頭を下にして数分間、押し沈めた。ポール、リューク、ジョンの遺体は、その都度、水から引き上げて寝室に運び、シーツにくるんでベッドに横たえた。最後にノアが呼ばれて浴室に入ったときにはメアリーが水に浮いていた。ノアは異常に気付いて逃げ出した。アンドレアは取り押さえて水の中に沈めた。最年長の彼はもっとも激しく抵抗した。やがて動かなくなった。彼女はメアリーのみ水から上げると寝室に運んでベッドに横たえた。ノアの遺体は浴槽に浮かんだままだった。水は尿便や嘔吐物で汚れていた。

一切が終わると、彼女は警察と夫に電話をかけて、自分がやったこと、そしてそれに対して全責任が自分にあることを淡々と伝えた。「自分が何をやったのか分っているのか」と警官の問いに彼女は答えた。「わかっています。私が子どもたちを殺したのです」

なぜ、事件が起きたのか。事件の背景について次のように説明されている。

《アンドレアは供述している。悪い母親である自分が育てると子どもたちが致命的に墮落してしまう、そうなる前に殺したほうが子どもたちは天国に召し上げられると考えたのだ、と。自分の中にはサタンが住んでおりこのサタンを退治するには自分が死ぬほかないと考えて何度か自殺を試みたがうまくゆかず、ついにサタンの命令に従って殺した、とも。

彼女は実は、事件から7年遡る1994年に最初の子どもノアを出産した直後からす

でに幻聴と幻視に悩まされていた。サタンの声が聴こえる、誰かがナイフで刺し殺されているのが見える、等々。医者に診せれば、分娩後、ホルモンのバランスが急激に変化することによって生じるうつ病で、10人に1人ぐらいの割合で産婦が経験するという出産後抑うつ症（PPD）の重度のものと診断されていたであろう。しかし、彼女は恐ろしい幻覚のことを誰にも秘密にして一切、医者にかかろうとしなかった。このため病状が精神病にまで進んでしまった、と言われている。

他方、イェーツ夫妻は厳格でカルト的な（？）キリスト教指導者に帰依していた。女は可能な限り多くの子どもを産むべきだという教えがあったらしく、アンドレアは精神病の病状を抱えたままその後も妊娠、出産を繰り返し5人の子ども（ノア、ジョン、ポール、リューク、メアリーという名は聖書にちなんだものだ）を持つに至った。子どもをキリストの道から外れさせるくらいなら自殺するほうがましだという教えも彼女に大きな影響を与えたいらしい。

夫が妻の行動の異常に気付いて治療を受けさせたのは1999年になってからだった。薬物治療や電気ショック療法を受けたが、病状は回復しなかった。当時、アンドレアは、誰かに危害を加えそうで怖いとも精神科医に打ち明けていたという。また、症状が重いので、この上、妊娠、出産するようなことがあると分娩後の生理的変化によって生じる抑うつのため精神病が致命的に悪化すると考えて医師がこれ以上、子どもを持たないよう忠告していたのだが、にもかかわらず、彼女は薬物の服用をやめて2000年11月末に5人目のメアリーを出産した。産後の精神的荒廃が想像されるが、じっさい翌年3月にアルツハイマーを患っていた父（むろん症状が重くなる前だろうが、アンドレアは家事と育児に加えて、献身的にこの父親を介護していたという）が亡くなったのを機に、家事や育児はもちろん、自分自身の食事も含めた一切の活動ができなくなってしまう。このため、2001年4月から再び治療を受けていたのだが、6月20日の悲劇は避けられなかったのだ。》

ここに描きだされている以上の概要が、我々が事件について知りうるすべてである。山城むつみもこの事件については、我々同様知らなかった。《たまたま以前にジジェクがこの事件に言及しているのを読んで気になることがあり、ちょっと調べただけだ》と、彼は記している。事件のその後については、《アンドレア・イェーツは2002年3月に殺人罪で終身刑を宣告された。その後、検察側の法精神科医の偽証が判明し判決が覆った。再審はこの6月26日から始まる予定》ということである。殊更、この事件の特異さは見当たらないようにみえる。ジジェクは一体、この事件のどんなところに目を留めているのだろうか。

一般的な理解としては次のようなものではないか、と山城むつみは事件をこう単純化してみせる。

《PPDをかかえながらも5回も出産を繰り返し、しかも家事に、育児に、父親の介護

にと家にずっと縛り付けられて献身を強いられ続けていたのだ、PPDが悪化して重度の精神病になるのは当然だ、そこへ奇妙に偏った宗教への盲信が絡んでいたとなれば罪責感と妄想が嵩じて、サタンだ、ナイフだという異常な幻覚も見えるだろう、あまりにも抑圧され続けていた彼女のうちで何かがある日、突如、爆発しても不思議はなかったのだ、と。》

あまりにも単純すぎる図であり、彼と同様に《人間はこんなに単純なものなのか》という感想も湧き起こってくる。ところが、ジジエックは9・11直後に書いたエッセイ「現実界の砂漠へようこそ」で、こともあろうに《「テロ」事件と等価の出来事の一つとしてこのアンドレア・イエーツ事件を挙げた上で、ここには「リアルな／不可能な／説明できない何か」がありはしないかと言うのだ。》山城むつみも我々同様に、《ジジエック一流のアイロニカルな奇術で、一時的な思いつきなんだろうくらいに考えて流していた》が、ジジエックが本気でそう思っているらしいことがわかってきたと言う。

《その後、彼のレーニン論（Revolution at the Gates）を読んでいると、この事件が再び、しかもかなり詳しく取り上げられており、彼の関心が単なるその場かぎりの思いつきではなかったことを知った。それだけではない。彼はこの本ではこの事件を十月革命とショートさせるような文脈で扱っているのだ。「恐ろしいと思われるかもしれないが、我々はアンドレアが犯したような行為を非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ」と。》

ジジエックは度肝を抜くようなことをここで語っている。絶望的で無惨なアンドレア・イエーツ事件の一体、どこに「人を解放する隠れた潜勢力」が嗅ぎ分けられるというのか。そもそも「人を解放する隠れた潜勢力」とはいかなるものか。《レーニンと十月革命の「反復」（キルケゴール）を反時代的に扇動する彼の言葉は半ば以上、本気なのかもしれないと思えて来る》と、山城むつみはジジエックの『ジジエック自身によるジジエック』の中の次の発言を引用する。

《私たちがますます必要としているのは、私たち自身に対するある種の暴力なのだということです。イデオロギー的で二重に拘束された窮状から脱出するためには、ある種の暴力的爆発が必要でしょう。これは破壊的なことです。たとえそれが身体的な暴力ではないとしても、それは過度の象徴的な暴力であり、私たちはそれを受け入れなければなりません。そしてこのレベルにおいて、現存の社会を本当に変えるためには、このリベラルな寛容という観点からでは達成できないのではないかと思います。おそらくそれはより強烈な経験として爆発してしまうでしょう。そして私は、これこそ、つまり真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚こそ、今日必要とされているのではないかと考えています。》

山城むつみは、ジジエックが《現存の社会を本当に変えるためには》と腰を据えて発しているようにみえることに注意して、言葉を添える。《彼は、世界に関する解釈をめくるめく変えているだけのように見えて本当は、世界そのものを変えたいと願っている、

今日では希少な理論家の一人なのかもしれない。口先やポーズでない「真の変革」を求めて暴力をも肯定しようとしているかのようにさえ読める。

9・11の「テロ」と十月革命とアンドレア・イエーツ事件を並置した上で、そこに「人を解放する隠れた潜勢力」を見出そうとするジジエクのスタンスはきわめてリスク一なものだ。そんなことを昨今、不用意に口走れば、原理主義的なテロリストとみなされるからではない。そんなケチなことではなく、革命を扇動する彼の言葉自体が「テロ」や強制収容所や殺戮をもたらしようという可能性を彼自身がまったく否定しようとしていないからだ。そのような危険をちらつかせて尻込みさせようとする論者に対して、彼はリスクを承知の上で賭けに打って出ようとしているのだ。「恐ろしいと思われるかもしれないが、我々はアンドレアが犯したような行為を非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ」という言葉には、彼の理論の尻馬に乗ってリベラリズムやPCや民主主義に対して舌を出してみせるだけの連中には見られない賭けがある。焦りのようなものさえ感じられる。》

ジジエクの《真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚こそ、今日必要とされているのではないか》という言葉は、我々がもう一度真剣に噛みしめてみなくてはならない鬼門であるだろう。激痛を避けては「真の変革」などありえないことが明白であるにもかかわらず、予測される激痛の前で我々は立ち止まって「真の変革」を求めなくなってしまった。あるいは、激痛抜きの「変革」を志向するようになってしまった。もっと直<sup>ちよくせつ</sup>截な物言いをすべきかもしれない。ジジエクの言う「苦痛」が《「テロ」や強制収容所や殺戮をもたらしようという可能性》を喚び込むものであるかもしれないとすれば、その「可能性」の前で「真の変革」を求める我々の気持も萎えてしまった。そんな「可能性」はもうコリゴリだという思いだけではなく、《「テロ」や強制収容所や殺戮》を潜り抜けることになかに「真の変革」は見出されないどころか、ますます遠ざかっていくばかりであるのを、我々は歴史的経験としてもっているからだ。

人間の歴史はいまだかつて一度も、《「テロ」や強制収容所や殺戮》にも耐えうるような「真の変革」を手にしたことはなかった。「真の変革」の課題はいつだって、《「テロ」や強制収容所や殺戮》に強引に押さえ込まれてきた。「真の変革」という理想が《「テロ」や強制収容所や殺戮をもたらし》てきたことを考えるなら、そんな理想はもたない代わりに、《「テロ」や強制収容所や殺戮》をも遠ざけておきたいというのが、人々の偽らざる本心であった。いうまでもなく《真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚》が《「テロ」や強制収容所や殺戮をもたらしようという可能性》を否定しえないものであるなら、やはり我々は「自覚」を持とうとしつつも、その「可能性」の前で何度も立ち止まらねばならない。しかし、ジジエクはアンドレア・イエーツ事件の前で立ち止まっているだけではダメで、「人を解放する隠れた潜勢力」を見出せ、と言うのだ。

《ジジエクは、PPDを持ち出して理解しようとする安易なお喋りをあたまから退けて

いる。そんな理解を無効にするものがこの事件にはある、と。彼が代わりに注目する座標軸はキリスト教だ。それもカルト的に偏っていて異常に歪んだ教義ではなく、隣人愛というごくまっとうで理想的な黄金律である。

アンドレアは自分のことを顧みることなく、ただひたすらに夫のため、子どもたちのため、病気の父親のため、自己犠牲的、献身的に尽くした。「汝自身を愛するように汝の隣人を愛せ」という命法を文字どおり実行しようとしていたと言っているのだが、ジジエクはアンドレアの残酷な暴力の原因を、ほかでもないこの隣人愛の姿勢に見ようとするのだ。》

なるほど、「汝自身を愛するように汝の隣人を愛せ」という究極のヴィジョンをもって、アンドレアの無惨な殺人が説明されるならば、事件は事件から離れてもはや隣人愛の精神を人間が実行することはいかにして可能か、という問題のなかで事件は語られることになるだろう。「隣人愛」の精神が人間にとって、いかに耐えがたく、残酷な観念であるかを、山城むつみはフロイトの次の言葉を引用して示す。

《われわれにとって隣人は、たんにわれわれの助手や性的対象たりうる存在であるばかりではなく、われわれを誘惑して、自分の攻撃本能を満足させ、相手の労働力をただで利用し、相手をその同意をえずに性欲の道具として使用し、相手の持物を奪い、相手を貶め・苦しめ・虐待し・殺害するようにさせる存在でもあるのだ。》(浜川祥枝訳『文化への不満』)

隣人愛とは《ついにはこの近き人(Nebemensch)に対して容赦のないサディストになることを強いられるということ》であり、《それが内部に喚起する過剰な攻撃性と享樂ゆえに自分自身が怖くなってひとは隣人愛という掟のただ中で踵を返して退却する》というフロイトの認識を継承したラカンが、《私は私の隣人を自分自身のように愛することに尻込みします。というのは、そのことの果てには何か耐えられない残酷さのようなものがあるからです》と端的に述べる。《ちなみに、ラカンは、その残酷さは隣人のものなのか、それとも自分のものなのかという問いに、両者は異なるものではない、同じものだと答えている。隣人愛に暗礁として伏在している攻撃性は、他者に向けられものであると同時に自己に向かう自己破壊的なものであって、両者は区別できない。アンドレアの場合も、彼女が何度か自殺しようとした衝動と子どもたちを溺死させた衝動とは恐らく異なるものではなかっただろう》。

「過度の残酷さはキリスト教的愛の必然的裏面なのだ」と断言するジジエクが、このフロイト＝ラカンの認識を踏まえているとしても、《彼の力点は、キリスト教的な愛をそれが秘める残酷さゆえに否定することにはない。逆に、「愛ある攻撃性」という倒錯的な核においてキリスト教の遺産を継承せよと言うのだ。愛が秘めている攻撃性を「人を解放する隠れた潜勢力」として肯定せよ》と主張している、と山城むつみは言う。ここでなにが言われようとしているのか。隣人愛には他者にも自己にも向かう自己破壊的な攻撃性が伏在している。もしこの攻撃性を回避するなら、隣人愛からも遠ざからなくて

はならない。逆に、隣人愛をどうしても貫こうとするなら、攻撃性にも耐えなくてはならない。つまり、隣人愛が秘めている攻撃性によって隣人愛そのものが断たれてしまうかもしれないとしても、人類が隣人愛を本当に成就しようとするなら、その攻撃性の中に微かな可能性を探り当てなくてはならないということだ。

《重要なのは、自己を否定しようとするのがそのまま他者を攻撃しようとするところでもあるようなこういう残酷さが——より正確に言えば、そういう危険な攻撃性の生じる可能性が——「近き人」(フロイト)に対する愛にはつねに伏在しているということだ。この意味では、近くにいる人は愛せない、愛せるのは遠くにいる人だけだと言ったイワン・カラマゾフは、隣人、近き他者をこそ愛すべしという命令を一般論として外側から固執する人々よりもこのリスクを、自身の愛の経験の内側から直覚していたと言っている。》

イワン・カラマゾフの逆説は、人類愛はいつだって隣人愛を除外したところで鳴り響いている、あるいは、隣人愛はいつも隣人を愛さない人によって唱えられる、というところにみられる。隣人を愛そうとする人、もしそのような人がいると仮定するなら、おそらくその人は、隣人愛などけって口にしないだろう。別の言い方をすれば、無償の愛というもの(があるとすれば)は遠くにいる人に対しては成就するが、近くにいる人に対しては成就しないどころか、つねに残酷な攻撃性が含まれているということだ。しかし、「汝自身を愛するように汝の隣人を愛する」ことができない「現存の社会を本当に変え」て、隣人愛が可能な社会を実現するためには、その残酷な攻撃性がどうしても避けられないことを自覚しなくてはならない。

《自他に向かう破壊的攻撃性の生じるこの暗鬱な可能性には、アブラハムがイサクを奇蹟的に受け取りなおしたように、たとえ万に一の確率であっても、そこを無事、文字どおり何事もなく通過するパッセージが生起し得る。ならば、近き人、隣人を愛せという命令は、その愛にたちこめる「暗い可能性」(キルケゴール)のただ中でその奇蹟に賭けよという命令にほかならないのではないか。賭けに負ければ、残念ながら十中八九そうなるのだが、アンドレアの場合のように、攻撃的な暴力(殺人)か、自己破壊的な暴力(自殺)か、いずれにせよ深刻な悲劇が結果してしまうだろう。しかし、たとえ万に一の確率であっても、賭けに勝つてかの奇蹟的なパッセージを引き当てることができれば、隣人愛は、事前の悲壮で悲劇的な深刻さとは打って代わって、バカバカしいような非暴力の喜劇(こういう表現は不謹慎に響くかもしれないが、ここでもアブラハムやヨブの受け取り直し、すなわち「反復」のことを考えてみて欲しい、背理なもの不条理なものとはそういうことではないか)として成就するだろう。この場合、近き他者、隣人を愛するとはついには、破壊的な暴力に転じる多大なリスクを承知でそのような非暴力(単なる暴力の否定、単なる暴力反対ではない非暴力)の喜劇に賭けるということにほかならない。恐らくアンドレアも子どもたちに対する自己犠牲的な愛のただ中で賭

けねばならぬ一瞬があったのであり、そして、不幸にも負けたのだ。その結果がああ残酷劇、ああ暴力的な悲劇だったのだ。」(引用者註一「パッセージ」は passage 仏語で、「ガラスの屋根が張られた街頭の通路。パッセージとも)

問題とはなにか。隣人愛とは《ついには、破壊的な暴力に転じる多大なリスクを承知でそのような非暴力(中略)の喜劇に賭けるということ》だとして、この「賭け」にはアンドレアの場合のように十中八九負けて、深刻な悲劇になってしまう事態が待ち受けている。それでも万に一の確率で「賭け」に勝つ奇蹟が起こることは否定できない。この場合、「賭け」に勝つ奇蹟に人間(当事者)はどこまで関与しうるのか。つまり、奇蹟に対して人間はただ単に偶然の産物として受けとめるだけのことなのか、それとも悲劇が奇蹟に変わる要素は人間がつくりだされなければならないのだろうか。もし人間がつくりださねばならないとすれば、そんな奇蹟を引き起こす力量はどのようにして持つことができるのか。どう考えても偶然にまかすことはできない。悲劇はあまりにも大きくて、深刻にすぎるからだ。どんなに困難であろうとも、奇蹟が引き起こされる筋道が明らかにされ、その筋道を辿る力量を人間が身につけないかぎり、神頼みのようにして奇蹟の成就に賭けるわけにはいかないだろう。

《目と鼻の先にいる近き他者との関係には「暗い可能性」があるということ洞察すること。そしてそこでリスクな賭博に打って出ること。しかもこの不利な賭けに勝つこと。これほど厄介なこともなさそうだが、この卑近な厄介を避けてなされるいかなる革命も「真の変革」とはなりえないということだろうか。だとしたら、我々はアンドレアの殺人をただ忌まわしい病んだ暴力として嫌悪しているだけでよいのだろうか。三たび読み直そう。「恐ろしいと思われるかもしれないが、我々はアンドレアが犯したような行為を非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ。》

山城むつみは、《悩ましく難しい問題である》と最後に呟く。隣人を愛することは敵を愛することにも等しい。したがって、近くにいる人との関係に見出される「暗い可能性」とは、敵との関係に見出される「暗い可能性」にほかならない。「暗い可能性」とはもちろん、極小の「可能性なき可能性」であって、敵を味方にするのできるくらいにほとんどありえない「可能性」である。にもかかわらず、敵との関係に「可能性なき可能性」を見出そうとするのは、敵の中にもう一人の自分を感じ取る関係をけっして否定していないからだ。いいかえると、敵をどこかで流動的な関係とみなして、自分との関係においてけっして遮断していないからである。自分が自分に対して敵になってしまうという関係に、どこかで自覚的だからだと言うこともできる。

ほとんど可能性なき「暗い可能性」であっても、「暗い可能性」がある以上は、《リスクな賭博に打って出》なければ、その「暗い可能性」にすら直面することはできない。もちろん、「暗い可能性」に直面したその先が最大の問題であろう。多くの犠牲者を生

みだすだけの悲劇に終わってしまう高い確率の何重もの困難に覆われるなかで、「暗い可能性」に結びつく「なにか」を手にすることができるかだろう。そのためにも「暗い可能性」の中に踏み入っていく《リスクな賭博》を避けてはならない。単なる無惨な結果に終わったただけであったとしても、「暗い可能性」に結びつく一筋の「なにか」を驚嘆させるためにも、《リスクな賭博に打って出》なくてはならない。そして何回も負けつづけたとしても、その負けの中から一筋の「なにか」を掴み取ってくるることができるなら、一筋の「なにか」は連綿とした流れをかたちづかって、やがて《不利な賭けに勝つこと》のできる場所へと我々を導いていく筈だ。「真の変革」を行うためには地獄を潜り抜けて行かなくてはならない、もしジジエクがそう言っているのであれば、たとえ悲劇に終わったとしても《リスクな賭博に打って出る》という提起には全く異論はない。

「爆笑問題」の太田光と中沢新一が対談「宮沢賢治と日本国憲法」(『すばる』06. 7)で、山城むつみを取り出しているジジエクの言説とオーバーラップする発言を行っている。中沢が現在の憲法論議の不毛さは、「土台の問題にたいしてはまったくの無思考」状態にあり、「憲法がすでに日本人の精神土壌に、ある部分ではすっかり根付いて」いるが、他方では、「同じ日本人の精神土壌の名前をもって、この憲法を否定しようとする強い勢力がある」というかたちで、「憲法を支えるべき土台の部分で、すでに分裂がおこってしまっているわけです。なにかがこんがらがってしまっています。このこんがらがった糸玉をほぐす努力をいましておかないで、現在の国際情勢などというものに押されるようにして憲法を改正してしまうと、僕たちの時代は将来の日本人にたいしてひどい汚点を残すことになってしまう」と言う。

宮沢賢治の政治思想は、「戦争に突入し、戦争を遂行していった戦前の日本と、戦後の平和憲法のもとに発展をとげてきた日本とが、いったいどの部分では切れていて、どの部分ではつながったままかということが、あいまいなままにされてきた」、その問題に深くコミットしてくるというのが、対談の観点である。「あれほど動物や自然を愛し、命の大切さを語っていた賢治が、なぜ田中智学や石原莞爾のような日蓮主義者達の思想に傾倒してい」き、おそらく「満州事変なども肯定する」のがわからないと疑問を口にする太田に、中沢は「西欧の合理主義やモダニズムにはない思考」に嵌まっていく「感情に突き動かされて戦争に突っ込んで、日本は崩壊へなだれ込んでいきました。その思考や感覚と、戦後になってあの尋常ならざる憲法を日本人が『これこそ求めていたものだ』と熱狂的に受け入れた思考と感覚とが、僕にはまるで一つながりのもののように見えるんです。宮沢賢治が田中智学の思想に共感して、そこからたくさんの童話を生みだしていった道筋とも、それは深いところでつながっているように見えます」と語る。

宮沢賢治の謎は、彼が「一時期のめりこんだ政治活動と、童話の創作活動がどういう関係にあったのか。政治活動を否定したことによって、そこからあの童話の世界が生まれたのではなく、このふたつはじつはほとんど同時現象なんですね。あの奇跡のような

傑作群と、危険なユートピア思想への傾倒は、深くつながっている」(中沢) ところにある。「彼の童話には、人間と動物のコミュニケーションが回復される場面が頻繁に出てきます。現実の世界では、動物と人間は完全なディスコミュニケーションの状態、動物の思いは人間に伝わらないし、人間の思いを受け止めるほど、動物は人間を信用していない。それにもかかわらず、宮沢賢治は両者のコミュニケーションの可能性を描こうとした。熊と人間が思いを通わすことは可能だし、そうしなければよりよい社会はつくれない、という考えです。そうやって虐げられているもの、弱いもの、声を出さないものの声を、聞き取らなければいけない。そういう社会が作り上げられなければいけないという思想が、あの童話群にはみなぎっている。」(中沢)

この賢治の思想の中に、「自分のことを顧みることなく、ただひたすらに夫のため、子どもたちのため、病気の父親のため、自己犠牲的、献身的に尽くした。「汝自身を愛するように汝の隣人を愛せ」という命法を文字どおり実行しようとして」、自分の5人の子どもを殺害するに至ったアンドレアの残酷な悲劇が映し出されているのが感じ取れるだろう。彼の「童話が、戦後の平和思想を推し進める日本人の感情や思考を支える役目をしてきたことは、たしかなんだと思います。そして戦後の日本をつくってきたいろんな価値の象徴として、憲法九条というものがあります。その意味では、賢治の思想は明らかに現在の憲法とつながっています。しかし、宮沢賢治が表現活動をおこなっていた現場に立ち会ってみると、そこにはおよそ戦後の日本人のものの考え方とは相容れないものが沸き上がっています。すごい矛盾が沸き上がっています。それなのに、賢治の研究者もほとんどの愛読者も、そのことには気がつかないか、気がついても見えないふりをしてきた。」(中沢)

アンドレア・イエーツ事件は、「宮沢賢治の抱えていた矛盾とは何だろう。彼の作品の中には正義や愛があふれているけれど、その正義こそが結果として人を殺す思想にもつながっていく。そこを深く見つめなおさないと、もう一度同じことが起こると思うんです」という太田発言につながってくるが、おそらく問題は思想や作品の中にあふれている正義や愛が現実の中ではそのまま伝わらずに捩れて、反転していくところにあるにちがいない。このディスコミュニケーションの問題は、中沢新一によって次のように説明されている。

「つまり、違う意識の構造を持った者同士が、誤解を伴ったディスコミュニケーションをすることによって世界は成り立っている。そこには、無数の誤解やずれがあるけれど、そのディスコミュニケーションの中で、この世界の豊かさがつくられているともいえます。

市民社会のレベルまではそれでいい。ところがそれがどこかで反転をおこす。たぶん宗教、国家、法という、現実を離れた大きな幻想が関わってくるとき、共同体というのがディスコミュニケーションを複雑に調整しながらできていることじたいが、非常に危険な作用を及ぼすこととなります。国家も法も、単一の価値を立てようとしします。宗教

は、いっそう単一な価値を立てて、そこに人格全体を巻き込んだ意味づけをしようとする。

そうになると、国家、宗教、法が作動している世界と、ディスコミュニケーションを命として、豊かな世界を育てている世界との間に、大きな齟齬が生じてきます。この食い違いが次第に大きくなり、国家的な規模の政策の中に人間が巻き込まれていくとき、ディスコミュニケーションが、危険なマイナス要素に変貌していきます。

法律も宗教も、人間からディスコミュニケーションをなくして、みんな同じことを考えれば世界は完璧なものになると考えていますね。みんな同じ宗教を信じ、同じ神様に心を向けていれば、最高の共同体ができると思っている。それを信じている人々の間では、矛盾が発生しにくいですね。ところが、僕らの世界は、ディスコミュニケーションでできている。宮沢賢治は、この世界がディスコミュニケーションでつくられているということに、ものすごく悩んだ作家だと思います。これを乗り越えたいと思っていた、他人の苦しみを自分の苦しみと同じであるような状態をつくりあげたいと思っていた。そんな時に、彼は宗教的思想にのめり込んだのだと思います。宗教的思想の中に、自分の理想を見いだそうとした。だからこそ、ディスコミュニケーションをなくして、人々が正しい考え方を持って、理想の社会へ向かっていくための運動にのめり込んでいったのでしょ。

ディスコミュニケーションで成り立っている我々の世界を短絡的にコミュニケーションの世界へとつくり変えようとするとき、その規模の大きさに応じて起こる悲劇も大きくなってくる。コミュニケーションにとってディスコミュニケーションはなくさなくてはならない欠損になり、その欠損はやがて抹消しなくてはならないものにまで成長し、そこに悲劇が生じてくるのだ。このコミュニケーションの衝動の底にあるものが、過剰な愛であることはいうまでもない。「賢治のように、人間や動物、自然への愛情が深い人ほど、擬人化の思想にのめり込んでいく。その先にあるのは何だろうか。強烈な愛情ほど、人を深く傷つける可能性を含んでいる。深い愛情をもって、人を殺すということが起こり得るのではないかと、考えてしまうわけです。賢治が宗教的思想に傾倒したのは、愛が深かったゆえの業ではないかと。／平和の問題というのは、最終的には、人間の持っている愛とは何かという問題に突き当たると思うんです。愛が人類を破滅させる危険も十分にある。愛がなければ、戦争も起きませんからね。」(太田)

この言葉を引き継いで中沢は、戦争を含めて愛情が引き起こす問題について言及する。「その愛情ゆえに、自分とは違うものとの間にコミュニケーションを発生させようとするし、ディスコミュニケーションの壁を乗り越えたいと思う。動物を擬人化してまで、ネズミをミッキーマウスにしてまで、コミュニケーションしたいと思うわけです。子供たちには、この願望がすごく強いですね。子供たちがまわりの世界とまだよくつながっているからでしょう。母親の愛情からまだ切り離されてない幼児は、この世界は愛に満ちていると感じている。ピーターラビットにしても、くまのプーさんにしても、いろん

な動物を擬人化して、動物たちの世界との間に愛を実現させたいと思っています。

宮沢賢治の場合は、その欲望が人並みはずれて強かったんでしょう。しかし、この愛ゆえに、危険な思想も生まれるんですね。ロシア革命に突き動かされていった人たちの書いたものなどを読むと、宗教的なものの好きな僕は、そこにしばしば崇高な愛を感じます。」

「崇高な愛」であればあるほど、その「崇高」さが現実と切り離されている度合いだけ、現実からの手酷い報復を受けないわけにはいかない。「あのナチズムの場合でさえ、血が結び合う共同体への歪んだ愛情が、ドイツ人をあそこまで連れて行ってしまった。当時のすぐれたドイツの思想家でさえ、ナチズムの発想にはなにかよいものがあると認めていました。それは思想というものが、なんらかのかたちで愛に関わりを持っているからだと思います。ほんとうに微妙なものなんです。真理はいつも危険なものそばにあって、それを求めると、間違った道に踏み込む可能性のほうが大きいんです。」(中沢)

だからといって、もう愛を持つことをやめようとか、真理を追求することから撤退しようとなっていていい筈がない。ここで、「恐ろしいと思われるかもしれないが、我々はアンドレアが犯したような行為を非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ」というジジエックの言葉を改めて思い起こす必要があるだろう。

太田は「愛情とは、いつも諸刃であって、愛情が相手を傷つけることがあるのだ、ということ、考えなければいけないと思うんです。愛情を表現すれば相手を傷つける、しかしそこから逃げずに自分と対峙する。賢治が表現したかったのは、そこじゃないかと思う」し、恋愛も含めて、「誰も傷つけず、ぼかぼかして、相手を包み込んでくれるような愛なんて、人間は持てないと思います。神の愛を無償の愛というけれど、人間がその愛を望むのは思い上がりというものでしょう」と指摘し、オウムの麻原が「神の愛を持ちなさい。憎しみは捨てて、もう一つ上のステージの愛を持ちなさい。その愛を持ってない人間は、ダメな人間だと否定した。だから、みんな殺せというところにつながっていった」と言う。

人間という存在は混沌とした暗闇とつながっているが故に、手を差し伸べてもどこからも得られないかもしれない一条の光をどうしても求めつづけずにはいられないことが、次の発言から伝わってくる。「癒しという言葉に、わーっとむらがっている人々にも、僕はオウムに近いものを感じてしまうんですね。人間の愛は、もっともっと未熟で、危ういものなのに、そうじゃないところはいこうとしているように見える。誰かを憎んだり、傷ついたりすることはすごく人間的なことなだけけれど、そこを否定して、逃げようとしているんじゃないか。過去の戦争も忘れたふりをしている。それじゃダメだろうと思う。戦争や、愛情から発生するネガティブな感情を否定することは、人間そのものを否定することですよ。」(太田)、「ギフトというドイツ後は、贈り物と同時に毒という意味も持っていて、贈り物を贈って愛を交流させることは、同時に毒を贈ることだともいう意味がこめられているんでしょう。」(中沢) 2006年8月12日記